

荻村伊智朗

— スポーツ界伝説の人物とその世界的使命 —



作・シェリル・ロバーツ

タウンシップ・パブリッシング・コオペラティブ

訳・高木 里絵

萩村伊智朗

— スポーツ界伝説の人物とその世界的使命 —

作・シェリル・ロバーツ

タウンシップ・パブリッシング・コオペラティブ

訳・高木 里絵

1993年4月発行

発行所 タウンシップ・パブリッシング・コオペラティブ
P.O. Box 16536, Vlaeberg, Cape Town, 8018, South Africa

著作権 シェリル・ロバーツ

ISBN: 0-9583796-1-0

表紙・挿絵 ルサンド・ルプワナ

レイアウト 高木 里絵

翻訳 高木 里絵

プロジェクトは、南アフリカの有色人種の子供達のスポーツへの参加を援助する。従って出版によって得られた利益は、南アフリカ各地の恵まれない子供達のために卓球を目的のために使用される。

今日の青少年と明日の将来のために

子供達は皆、理想を持っています。彼らの夢は、どこまでも果てなく広がります。しかし残念なことに、それらの夢、特に第三世界や発展途上国の子供達の夢が実現する事は、（もし実現されればの話ですが、）非常に稀なのです。暗い状況の中に生まれて来た子供達は自分たちの運命をコントロールすることができません。明日、夢から覚めて、無事に朝を迎えることができるかどうかさえも知らない子供も多いのです。

その一方で、貧しく辛い状況を打ち破って自分の夢を追い求めることのできる子供達もいます。荻村伊智朗氏もそんな子供の一人でした。戦争直後の貧しい日本に子供時代を過ごした彼は、その後自分の運命を力強く切り開き、見事卓球の世界チャンピオンになったばかりか、コーチ、そして今では国際卓球連盟の会長として素晴らしい活躍をしています。体中からみなぎる野心と自信に支えられて、荻村氏は、その才能と情熱を結合させ、世界中で最も偉大なスポーツ人の一人となったのです。

卓球選手、コーチ、運営役員、そしてスポーツ親善大使の役も努める荻村氏がスポーツ史上において伝説的な人物であることは疑いの余地がありません。個人的には、彼は自分が目的とした以上のものを達成しました。しかし、彼はそれだけでは十分満足できなかったのです。彼が求めているのは、スポーツによる世界的調和、平和、友好、そして、ポジティブなコミュニケーションの実現です。この目標を達成するために、彼は人間として出来る限りの努力をする決心をしています。

私は、荻村氏は、世界中の子供達にスポーツを広めるという役割に最適の人物だと信じています。そして、そのためにも荻村氏に関する本が必要だと考えました。今日の若い世代と彼らの将来を鼓舞し、勇気づけて、彼らが豊かで大切な人生を送ることができるような本が。

荻村氏に関するエピソードは非常に多数あり、彼の半生記が将来出版されることが望まれます。この本が目的とするのは、実在するスポーツ界の伝説的人物—自身のことのみならず、国と国民のために尽力する人物—を紹介することによって、今日の青少年に目標のようなものを与えることです。この本が紹介するのは、世界のすみずみにまでスポーツを浸透させることに人生をかけた人物の話です。

荻村氏の話は、特に南アフリカの子供達にとって非常に重要な意味を持ちます。なぜならば、この本を読むことによって、子供達は、荻村氏の生い立ちの中に、貧しく、質素な生活の中で、スポーツをするお金もないまま将来に夢を託す自分達との共通点を多数見つけることができるからです。恵まれない子供達にとって、悲惨な状況におかれているのは自分達だけではなく、今の大人の中にもそういう状況の下で生活したことのある人もいるのだということを知ることは大変大切なことなのです。

子供達には刺激や動機づけと同時に、他の人から愛され、大切に思われていると自覚することが必要です。そのようなポジティブな刺激を受けると、子供達はより高いレベルに発展しようとするのです。私は、子供達が荻村氏の話を読んで良い意味で刺激され、荻村氏が日本の誇る人物になったように、彼らが、彼ら自身、そして彼らの国が誇れる人間に成長することを願っています。もしかすると、今も南アフリカのどこかの町に、将来の荻村伊智朗が眠っているのかもしれない。

どんなプロジェクトでもそれが成功するには親切な人々の協力と援助が不可欠です。このプロジェクトを成功させるにあたって、情報収集に尽力くださった織部幸治氏、翻訳をしながら優しい言葉で励ましてくださった榎並悦子氏、インタビューの際初めてお会いしたにもかかわらず、この本の出版を暖かく応援して下さった上原夫人に感謝致します。上原夫人のような方がもっと沢山の世界には必要です。又、精神的に私を支え、励まして下さったエロル・ヴァウダ、ルシング・シェルドン、ジョー・カリム他、私に援助を差し伸べて下さった皆様に感謝致します。特に、荻村伊智朗氏には、まず、私のプロジェクトに賛成していただいたこと、そして、お忙しい中インタビューに協力して下さったこと、本当にありがとうございました。このインタビューを通して、私は、沢山のことを学ぶことができました。そして最後に、南アフリカ各地の子供達、私にこのプロジェクトを遂行する動機を与えてくれてありがとう。私は、ずっとあなたたちのことを思い、あなたたちみんなの幸せを願って来ました。この私の小さな努力によってあなたたちの明日が少しでも明るいものになることを願っています。

シェリル・ロバーツ

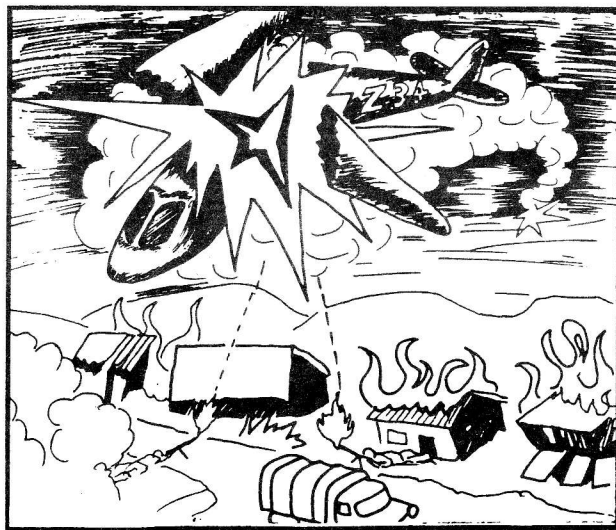
1993年 4月

第二次世界大戦の終わり

1945年、連合国は史上初の原子爆弾を広島に投下。日本は降伏し、第二次世界大戦は終結した。長期間の戦いに疲れ、経済が停滞し、崩壊した建物の中で、国々のモラルは最悪の状態にあり、各国は、自国の復興と自国民の利益だけを求めて戦後の荒廃からはい上がろうとしていた。

戦争が良い結果をもたらすことはほとんどない。国家は、戦争によってさまざまな影響を受ける。もしある国が、戦争に負けたことによって戦後の償いをする側に立った場合、その国にとって戦争の影響は多くの意味で壊滅的なものとなるのである。

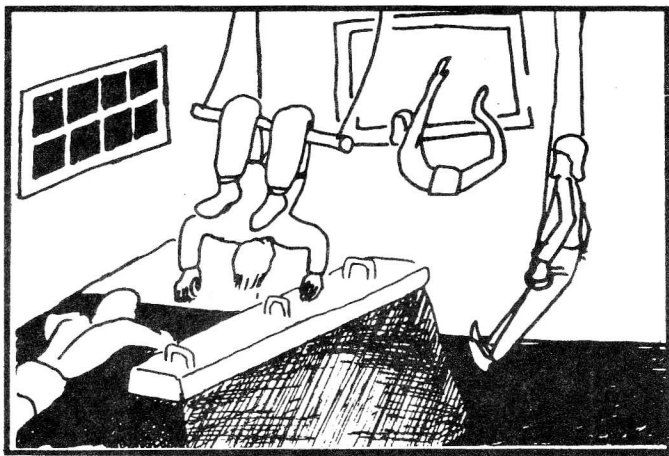
荻村伊智朗はその当時まだ14歳の少年だった。しかし、戦争の苦い経験は彼の記憶にはっきりと残っている。昼間なのに真っ暗だった空。戦闘機や爆弾の音。荻村少年の心の中は、国のために戦いたいという気持ちで一杯だった。戦争が何故、どのようにして起こったかはよく分からなかったとはいえ、少なくとも日本が日本人の助けを必要としていることははっきりとわかっていた。少年・荻村のこの多感さは彼の青年時代まで継続する。



「卓球のリズムが好きだ」

荻村少年は、学校時代を通じて様々なスポーツに親しみ、またそのどれにも大変優れた才能を現した。中学校時代には体操のチャンピオンになったばかりか、東京都下の少年野球リーグでは最高のピッチャーとして活躍した。しかし、そんな彼の心を本当に掴んだのは、彼が16歳のとき初めて出会った卓球だった。彼は、その時初めて手にした卓球のラケットを離す事なく、何時間も何時間もプレーし続けたのであった。しかし、当時の荻村少年には、この時の卓球との出会いこそが、自分が将来非常に深い影響を与え、形作って行くことになる卓球界への入り口であったことは予想もできなかった。

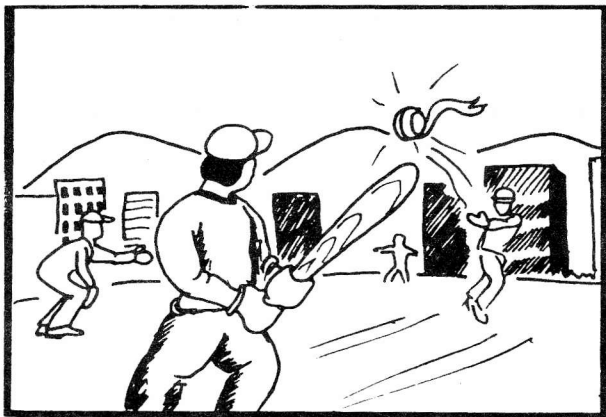
「その頃までにもう始めていた野球を続けることもできました。けれども、私が本当に魅かれたのは卓球だったのです。私の学校の二人の上級生が卓球をしていたのですが、彼らがプレーしているスタイルをみて、私も卓球が好きになりました。彼らは本当にうまくて、大変感心しました。そうです。



私は、卓球の腕の振りのリズムに夢中になりました。本当に感心したのです。」

「私たちのクラブにいた田中という少年が、ある時卓球クラブ内で交換日誌を始めたのです。部員全員が参加しなくてはなりません。毎日、一人がその日誌を家にもって帰り、次の日までに書いて学校にもって来て、次の当番に回すのです。日誌には、その日の練習の感想などを書きました。このクラブ日誌はそれから40年も続いたのです。」

「日本は本当に貧しかった。野球のグローブも、皮ではなくて、布製でした。私は、その地域では最高のピッチャーの一人でした。他のスポーツも好きでしたが、何よりも私が好きだったのは卓球のリズムでした。プレー中の音に夢中になりました。卓球に対しては特別な感情をもっていました。自分に才能がある予感がしたとかいうことではなく、卓球こそ私のスポーツだという気持ちがしていたのです。」



卓球がますます好きになるにつれて、できるだけたくさん練習したいという彼の欲求は一層強くなっていった。学業成績も優秀であった荻村はある有名大学に入学したが、その大学の卓球部があまり強くなかったので、後により強力な卓球部を擁する大学に転校する。

上原夫人と武蔵野卓球場

世界中のどの国にも他の人の夢を実現するために努力する人々がいるものだ。東京に卓球クラブを開いた上原夫人はそんな人々の一人であった。そのクラブは、上原家のビジネスの一つとしてスタートしたものである。

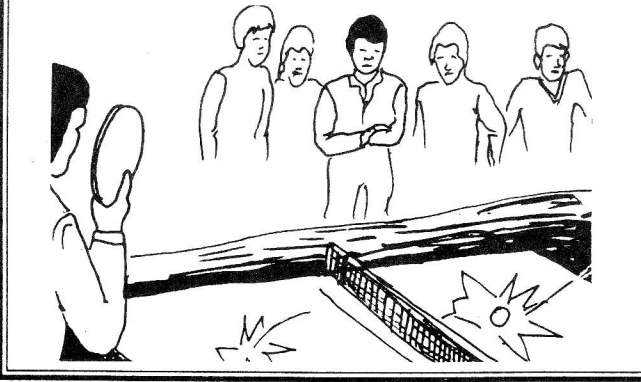
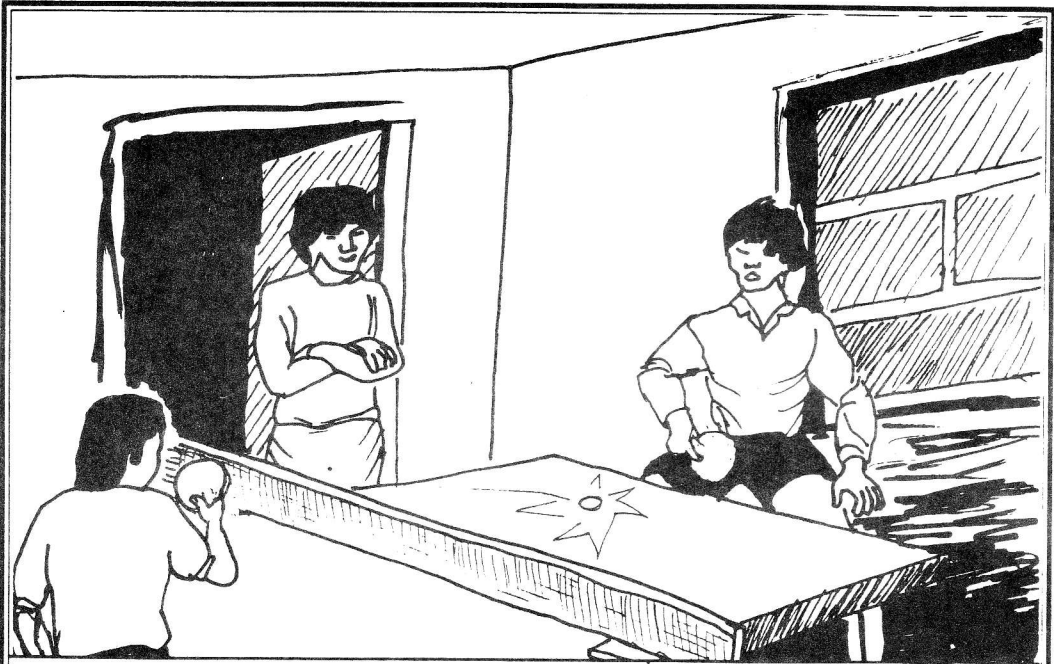
上原夫人は次のように話す。

「主人と私は当時、何かビジネスを始めようと考えていました。雑誌で、北海道にビジネスとして卓球クラブを開いた女性の話が載っていたのをきっかけに、私たちもビジネスの一つとして卓球クラブを設立することにしたのです。会員になるためには入会費をいただきましたが、会費の払えない人の入会を拒否したことはありません。できるだけたくさんの方が卓球に参加できるように応援していくのが私たちのポリシーでした。」

上原夫人は、若い日の荻村が彼女のクラブを訪れた日のことをこう話す。荻村は、熱心で、自信に満ちあふれていた。しかし、その日の彼女には、荻村が誰であるかはもちろん、彼女が荻村の将来にとってどんなにか大切な役割を果たすことになるろうとは知る由もなかった。

「若くて、瘦せっぽちで、まだ少年のようだった荻村氏がクラブに初めてやって来た日のことは大変はっきりと覚えています。彼は、礼儀正しく自己紹介すると、今度は自信たっぷりに私たちのクラブに強い選手がいるかと尋ねました。私は始め、彼が何を言おうとしているのか分かりませんでした。でも、後になって、彼が、自分より強い選手を探していたのだと気が付きました。こうして荻村氏は私たちのクラブに入会したのです。彼は完璧な選手でした。練習は一日も欠かさず、いつもより良い結果を得るために一生懸命努力していました。」

上原夫人によると、荻村は、始めは特に目立った選手ではなかったようだ。クラブ内での彼は、他のメンバーと同じように振る舞っていた。けれども、荻村の卓球熱は熱くなるばかりだった。卓球をするためには、自分がやりやすい相手だけでなくどんな選手とも進んで練習した。





「才能ですか。そうでもなかったですね。特に彼に才能があったとは思いませんでした。クラブには彼よりも優れた選手が何人もいました。始め、私たちは、彼は普通の選手だろうと思っていました。でも、真面目な選手でした。練習は一日も休みませんでした。いつでも、誰とでも練習したがっていました。型に関係なく、誰とでも練習するのです。それから、彼は、他の人を見下すようなことは決してしませんでした。こうして彼はクラブでも、人気者で、皆に好かれる選手となったのです。」

この当時、日本は戦争のがれきの中から再び立ち上がろうとしていた。当時の日本人のほとんどが、苛酷な状況の下で、生活を支えるために苦勞していた。



上原夫人は人々のそんな苦勞を目の当たりに見てきた。だから、彼女は、戦後の環境において若者がどんなに傷つき、どんなに高い理想をもっているかということなどをだれよりもよく知っていた。彼女が卓球に関わるようになったのも、こうした熱心な卓球ファンが、技術的にだけでなく、自分自身の理想をより高いものにしていくことを助けるためだったのだ。

彼女は毎日クラブに顔を出しては、選手達の洗濯物を手洗いした。ほとんどの選手は、たった一枚しか練習着をもっていなかったから、数時間にわたる練習が終わると、次の日のために洗濯をしなくてはならなかったのだ。

上原家には全ての選手が昼夜いつでも立ち寄れることになっていた。荻村は毎日上原家を訪れては卓球の話ばかりをしていた。彼の上原家への訪問は、彼が後に結婚するまで毎日続いたのである。

現在72歳になる上原夫人は、40年以上の歴史をもつ武蔵野練習場の運営に今も活躍している。彼女自身に子供はないが、自分には100人以上の孫がいると得意そうに話す。そして、目を輝かせ、嬉しそうにほほ笑みながら、実はその子供達は、彼女のクラブの会員たちの子供なのだと説明した。

荻村伊智朗、ロンドンへ行く

1954年のことだった。日本は、ロンドンのウェンブレイ競技場で開かれる第21回世界選手権大会に招待されたのだ。この遠征には荻村伊智朗を含む、20代前半の4人の若い男子が選ばれた。日本の外に出たこともなく、国際卓球界では全く無名であった4人はこうして世界の真っ只中に飛び出すきっかけを得たのだ。

しかし、当時の日本の切迫した経済情勢がこの遠征にストップをかけた。日本卓球協会

が、遠征費用を賄えないと通告してきたのだ。代表選手は、自分の経費は自分で払うよう要請された。果たして彼らはロンドンで戦後日本のスポーツ選手の実力を発揮することができたのだろうか。

「日本卓球協会は若い選手を選んで日本代表チームを結成しました。けれども、協会には資金がなく、もしロンドンに行くのなら、自分たちで資金を調達するようになってきました。もちろん、私の母にはそんなお金はありませんでした。金額は、当時の日本円で80万円でした。私のうちは貧しかったのですよ。行きたいのはやまやまでしたが、お金が無いということを知って、ほとんどロンドンでプレーすることはあきらめていました。」



しかし、荻村の夢が破れることはなかった。関係者は必ずこの遠征を実現させてみせると決意していた。そして、今度は、地元の卓球クラブの役員達が遠征費用の調達に立ち上がったのだ。荻村を始めとした若い日本選手団はこうして世界の舞台でプレーをするチャンスを得たのである。上原夫人が先頭をきって始めた募金運動は功を奏し、東京の至るところに設置された募金箱には、遠征を応援する人々が列を作った。

上原夫人はこう語る。

「募金運動をしたのは冬でした。外はとても寒かった。でも、私たちには目指すゴー



ルがあり、実現しなくてはならない夢がありました。私達は寒空の下、駅の外や、その他いろいろな場所に立ち、道行く人々に、私達の大切な選手を応援して下さいとお願いしたのです。遠征費用のない選手達を見るのは本当にかわいそうで、私達が絶対に行かせてやると心に決めていました。」

募金運動は大成功だった。人々の惜しめない援助によって遠征に必要な資金は集まった。人々は、才能ある日本の若者がその才能を最大限に生かすチャンスを得ることができるためには多少の苦勞を厭わなかったのだ。

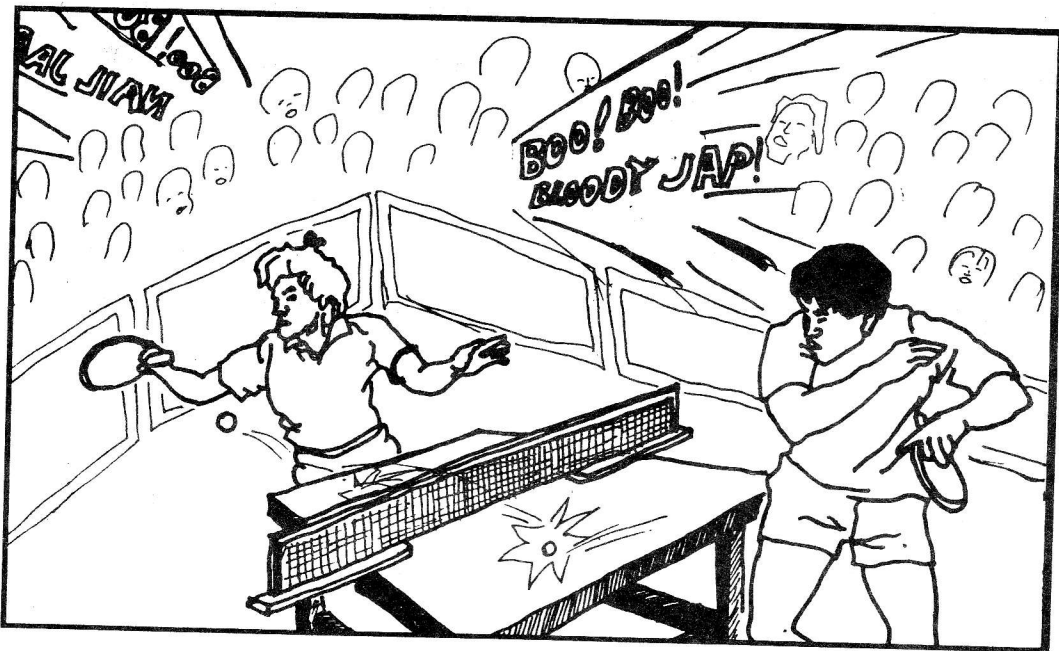
荻村は当時をこう振り返る。

「冬のさなかに3カ月間ボールの箱を持って吉祥寺や西荻窪の駅に立って10円募金をしたことは大変感動的な経験となりました。お金が十分に集まった時は本当に嬉しかった。人々が私達のボール箱に次々とお金を投げ入れてくれるので、私はどんどん嬉しくなっていきました。いくら貯まっただろうと気になってしかたがありませんでした。」

国際社会に拒否された日本

終戦後「戦犯」のレッテルを貼られた日本は、国際社会の嫌悪的であり、当時世界の反日感情は大変強かった。

このような冷たい状況の中で、ロンドンに遠征した4人の若い日本人選手は、西側諸国が日本に抱いている敵意を背中に感じながらプレーしなければならなかった。そして、日本人としての誇りを胸に、彼らは歴史的舞台上に登場するのである。世界がどのような反応



をみせるかは分からなかったが、彼らは、自分たちの使命が、国境を越えて卓球の技術を披露することによって、戦争で世界に拒絶された日本をスポーツを通じて世界の舞台に受け入れさせることであることを感じていた。

「反日感情は大変強かった。私達はそのために非常に神経質になりました。こわかった。競技場ではどんな技をみせてもだれも応援してくれませんでした。観客は皆、私達の対戦する相手のほうを応援しました。相手が点を入れると皆盛大に拍手しましたが、私達が得点すると全く反対でした。会場がシーンとするのです。そんな条件で試合をするのは大変でした。私達は努めて、敵意を敵意で返さないようにしました。何も言わずに、ていねいに微笑みました。そして、一生懸命プレーして、全ての試合に勝ちました。でも、観客はそれが気に入らないようでした。私達が日本人だから、私達の才能を認めたくなかったのです。」

日本選手団は戦争によって生じた反日感情はいかにスポーツの素晴らしさをもってしても拭い去ることはできないのだということを痛感した。痛々しい戦争の思い出の中で、人々の心のなかにはまだ、友好、交流、スポーツマンシップという考え方は生まれていなかったのだ。

しかし、故国日本の人々は選手団の活躍に大喜びだった。外国での勝利のニュースを日本人は誇らしげに祝福した。

「遠征から帰国した私達は、三鷹市内を凱旋パレードしました。日本人達は私達のことを誇りに思い、何千人もの人々が通りに出て来ておめでとうと言ってくれました。」

このような反日感情はしばらく、特にヨーロッパで日本選手団を悩ませた。しかし、そ

のうち、日本人の卓球技術が単に無視するには高すぎるものであることが気づかれるようになってきた。次第に、ヨーロッパでも戦後のわだかまりを捨て、世界のギャップをスポーツを通して埋めようと努力しているスポーツ人の勇気に称賛を送る動きがでてきた。

日本卓球選手団は1957年にオーストラリアにも遠征している。当時既に世界チャンピオンのタイトルを持っていた荻村もその一員であった。しかし、この遠征前にいやな出来事がオーストラリアで起こっていた。

「ある日本人の元水泳のオリンピック選手がいて、その人が繊維の商売の関係でタスマニアに羊毛を買い付けに行ったときの事です。彼がそこで泳ごうとすると、現地の人が、水が汚れるから泳いではいけないと言ったそうです。当時のオーストラリアには反日感情とともに白人至上主義が蔓延していました。」

このような事があったので、日本選手団は、ある程度の反感は覚悟していた。

「どんな反応が返ってくるかはある程度予想はしていました。でも、私達はじっと沈黙を守って、微笑していました。これは1957年のシドニーです。劇場の舞台から転がってしまったボールを取りに行くのと、トマトを顔に投げ付けられました。それから、私達は



キャンベラに行き、オーストラリア首相、首相夫人を始め、200人の外交官や政府関係者の前でプレーしました。日本人がオーストラリア首相の前で競技したのはこの時が初めて



でした。この催しは日本大使館の招待で行われたのです。その前にもメルボルンのボクシング・オリンピック・スタジアムで競技しました。この時は3,000人の観衆が入りました。国際的卓球競技を見るために、観衆は一人1ポンドの入場料を払っていました。2日間の競技で6百万円の入場料収入がありましたが、私達選手がもらったのは日本アマチュア規定に反しないように一人たったの2ポンドずつでした。その後、メルボルンの卓球協会がそのボクシング場を買い上げたという話を聞きました。」

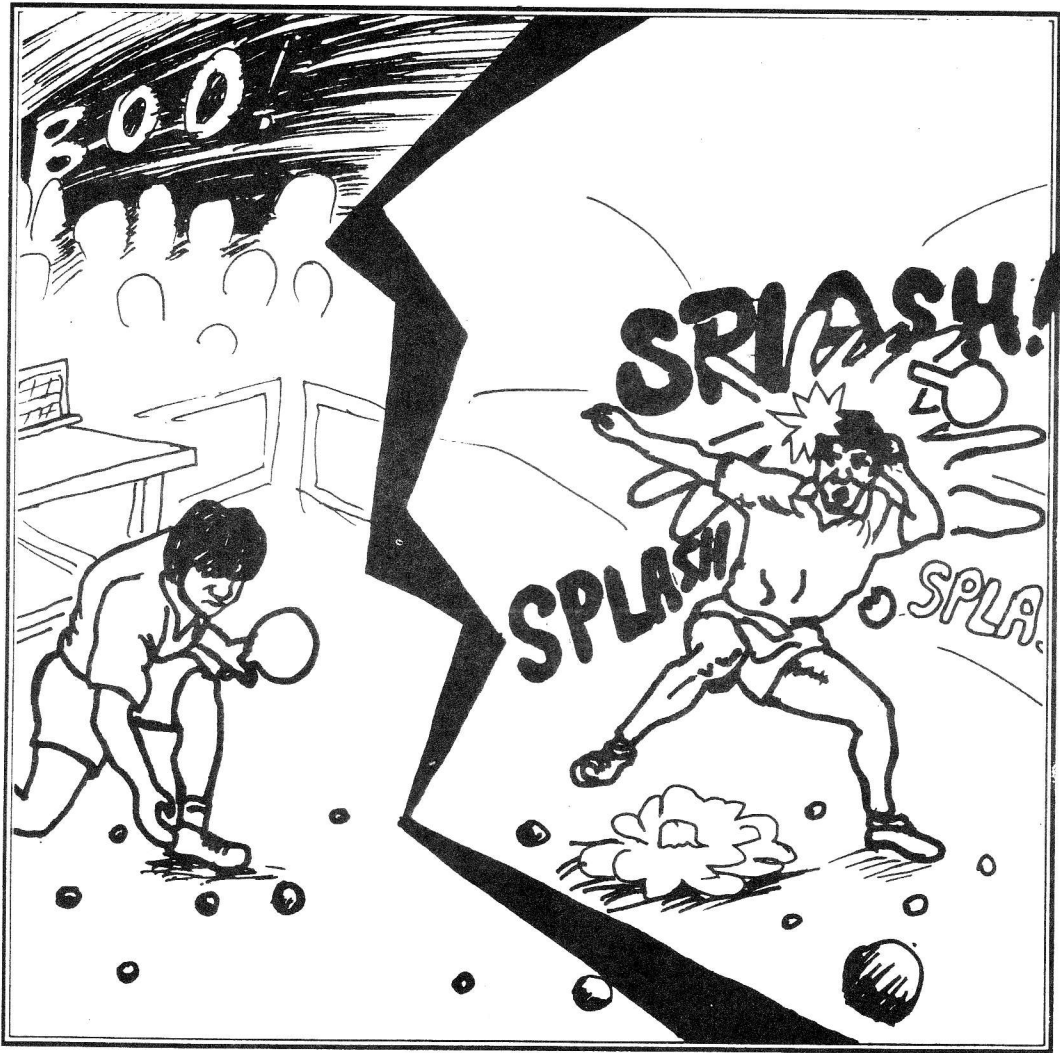
「その国際イベントはメルボルンの卓球協会が主催しました。私達が初めて競技した日から45年経った今日、そのボクシング場は47台の卓球台を擁する立派な卓球専用体育館に成長しています。何年経っても私達の訪問は現地の卓球の普及に貢献しているのです。」

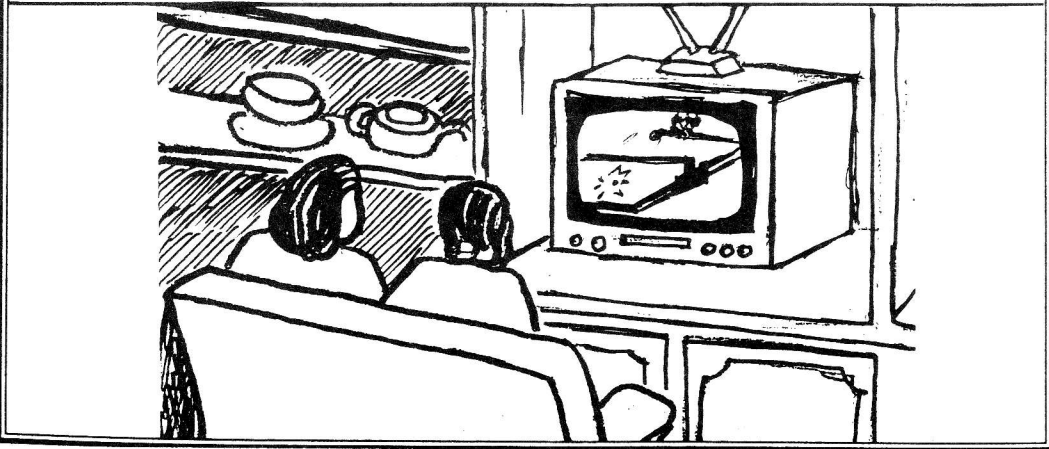
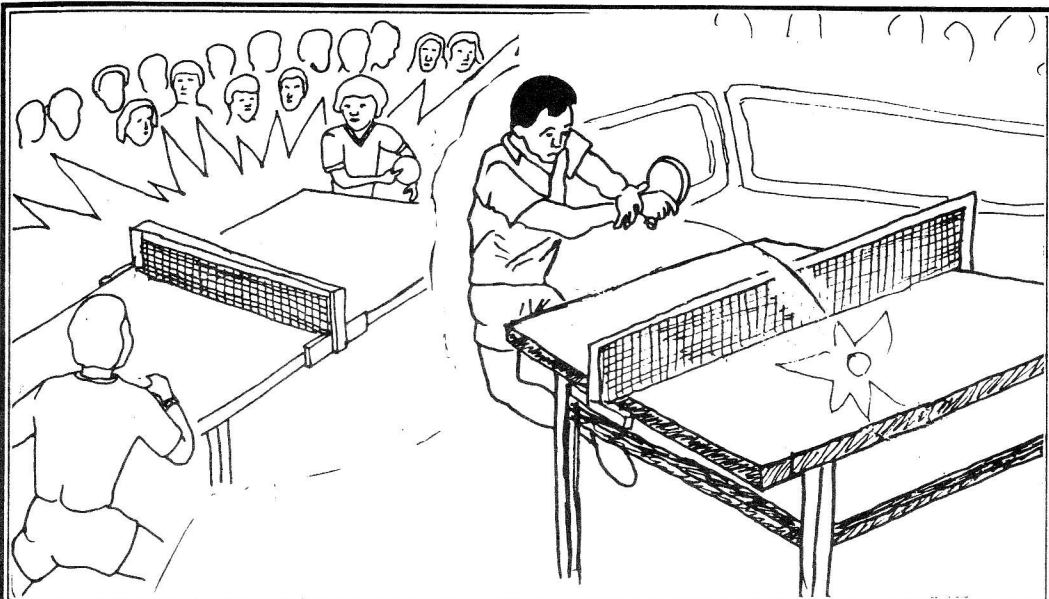
日本人選手の為に

何回かの遠征の後、荻村は卓球界の組織化ということを考えるようになった。オーストラリア遠征から帰国した若き荻村は、官僚機構の変革に挑戦を始める。彼はまた、外国遠征について現実的な提案をしようとしていた。そして、彼は、日本選手団の将来のことも考えていたのである。



「遠征から帰国すると私は日本卓球協会へ行き、遠征国に遠征中に上げた利益の50パ





ーセントを日本協会に還元させてはどうかと提案しました。そうすれば、アマチュアの資格を守りながら選手団のトレーニングキャンプを改善できると思ったからです。当時、日本卓球協会は貧しく、私達に出される昼ご飯も茶碗一杯のご飯とエビー匹だけでした。」

「私は協会に、私達だって、時にはステーキやもっと大きいエビーが食べたいと言いました。食事が良ければ私達も満足して練習できると。でも、役員の中には私の提案を違う意味に取った人もいたようでした。その人は、私達がプロ流にことを運びたがるとまで言いました。私は言いました。それは間違っている。私達は1ポンドしか払ってもらえなくても構わない。でも、考えてみてください。私達には満足なキャンプもない。これは、大変なことです。私達は技を磨いて、いいプレーをするために練習しているのであって、私達自身の利益の為にやっているのでは決してない、と。」

世界チャンピオン

1956年に東京で開催された世界卓球選手権で、荻村は男子シングルス部門で二度目の優勝を果たす。長年の辛い練習がやっと実を結んだのだ。しかし、彼にとって最も嬉しかったのは自分の国の人々の前で自分が世界一のプレイヤーであることを証明したことだった。日本のために精一杯のことをしようと思い決めていた荻村にとってこの優勝は二重の喜びであった。

「今までで一番嬉しかったできごとの一つは、1956年に東京で開かれた世界卓球選手権でした。自分の国でプレーできることがとても嬉しかったし、その上日本人の前で世界タイトルを勝ち取ることができて最高でした。」

「1954年から1955年にかけて日本選手団は国民のヒーローでした。何故かという、私



達はその頃、ヨーロッパやアメリカの外国選手達を次々と破って行ったからです。私達の勝利によって、卓球のことをよく知らなかった日本人でさえもが自信を取り戻したようでした。私は、東京での試合では必ずよい成績をあげようと決心していましたし、東京体育館で行われる選手権では必ず勝ってやると自分に誓っていました。」

「私の大学の練習場は東京体育館からそう遠くない所にあり、毎日体育館の前を電車を通るたびに体育館に向かって『勝つのは俺だ。』という暗示をかけていました。選手権では自分の家でやっているという感じがしていましたし、私達を信じ、応援してくれる日本人達の為に必ず勝ちたかった。」

この頃までに荻村は自分が日本人であることが何を意味するのかを悟っていた。日本が戦犯のレッテルを張られていたからこそ、より一層荻村は全ての日本人のためになることをしようとしていたのだ。彼は世界に日本人の良い面を見せようとした。同時に、第二次大戦直後の混乱の中で立ち直ろうとしていた日本に誇りを持って欲しかった。荻村は世界の舞台で競技し、次々と外国選手を下して行った。彼にとってこの時期は反日感情を退け、日本のスポーツ精神の素晴らしさを世界に示す絶好の機会であったのだ。

「そうですね。この世界選手権は、日本人にとって、日本の選手が外国選手と戦う様子を目の当たりに見ることでできた非常に良い機会でした。この頃ちょうどテレビ放送もスタートして、大勢の日本人が卓球に親しむことができたのです。こうして、卓球ブームが興りました。この選手権の後、卓球人口は数10万人に膨れ上がりました。日本人は誰でも皆卓球をしているような感じでした。」

荻村はこの時のタイトルを含め、全部で12の世界選手権で優勝している。

荻村コーチ誕生

日本選手団の一員として競技を続ける傍ら、荻村は1959年スウェーデン協会の招きで同国公式コーチとなった。この後1964年まで荻村は毎年冬になるとスウェーデンに赴き、アマチュア選手として練習をする傍らコーチを行った。

世界トップクラスの選手として、荻村にはどうしたらトップになれるかということは身にしてみても分かっていた。練習に練習を重ねること。それしかないのだ。彼はスウェーデンのコーチになると、まず手初めに練習の厳しさとは何であるかをスウェーデンの選手達に教えようとした。一日6時間から8時間に及ぶ練習はスウェーデン選手団にとって大変厳しいものだった。しかし、なにか成果をあげようとするれば、それを可能にするのはたゆみない努力、積極的な態度、そして正しい人格を持つことが不可欠なのだ。

「私がスウェーデンのコーチをしようと思ったのは、国際的に試合をする中で、国際的視野を持つようになっていたからです。外国の言葉や国の様子や文化について大変興味がありました。だから、スウェーデンでコーチをしないかというお誘いがあったときには喜んでお受けしました。給料は日本アマチュア規定の範囲内でしたけれども。」

「そうですね。私のコーチ方法は厳しい練習を基本としていました。選手にとっては厳し過ぎたかも知れませんが、でも、若い世代の選手達は厳しい練習に対する私の信念を受け入れてくれ、一生懸命ついてきてくれました。」

荻村伊智朗は卓球界の中でも最も優れ、革新的なコーチの一人として高い評価を受けている。彼がコーチとして参加した選手権で最も大きな成果を挙げたのは1967年にスウェーデンのストックホルムで開かれた世界選手権であった。

「1967年の世界選手権で私がコーチした日本の選手達は、男子ダブルスの一種目を除く全てのタイトルを勝ち取りました。男子ダブルスの優勝者は私がスウェーデンでコーチしていたときの生徒であったハンス・アルセアとシェル・ヨハンソンのペアでした。二人とも私がコーチしたのです。だからこの選手権では私がコーチとしては全てのタイトルを獲得したようなものでした。」

荻村のコーチとしての役割に深い影響を与えたのは、彼自身が選手時代に経験したコーチ法であったことは明白である。このことは、彼の献身的で意欲的なコーチ方法にもうかがうことができる。

「大学の選手時代、私は矢尾板弘さんという素晴らしいコーチに恵まれました。彼は一年365日毎日大学に来ていて、一日も休んだ事はなかった。彼は外に仕事を持っていて、コーチの仕事はボランティアでしていました。」



荻村は矢尾板コーチから本当の意味でのレッスンを受ける。自分の経験とも併せて、荻村は具体的なコーチ法を編み出して行く。

「青少年のコーチをするに当たって大切なのは、彼らと毎日接触するということです。そのことによって、彼らの気持ちをつかむことです。そして、その上で自分が何をすべきか、するべきでないかという基本的なことを決めることが重要なのです。」

「ここで大事なのは、コーチは、選手の想像力や創作力を決して妨げてはいけないということです。三流のコーチは自分が良いと思いつけている方法を選手に押し付けようとして、これをしろ、そんなことはするなと命令します。そういうコーチは選手に何がしたいかと尋ねることもせず、選手をじっくり観察することもしないのです。」

「矢尾板コーチはいつも練習に出ていましたが、決して私達の邪魔をするようなことはしませんでした。何か良いアイデアを思いつくと、私達選手と話し合ってから実行に移していました。」

「多くのコーチたちは、コーチであるということは常に選手に何をすべきかということを示すことであると思っています。でも、本当は、コーチというものは選手を自由なことでその選手はもっと良い選手になれるということを信じていなければならないのです。しかし、多くのコーチは何でも自分で仕切ってしまうことで逆に生徒達の才能を限定してしまっているのですね。」

「コーチたちに一番言いたいことは、できるだけ選手達の邪魔をしないようにしながら彼らを助けるようにするということですね。」

荻村はペンホルダーの選手も、シェークハンドの選手も世界レベルまで引き上げた。この時も彼は自分が以前にコーチしてもらった人々の影響を受けている。このような影響は、彼の積極的な行動とあいまって彼を国際的権威のあるコーチに押し上げていった。

「私が影響を受けたもう一人の人は、1954年から1959年まで日本のナショナルコーチをなさった長谷川喜代太郎さんです。この時期、私達は世界選手権5連覇を達成しました。この方は、ほとんどコーチらしいコーチはしませんでした。私がこの5回の選手権の間に受けたアドバイスは1959年の一回だけでした。1954年の選手権に優勝した時などは、私は長谷川コーチの所にいき、アドバイスをしないでいてくれたことにお礼をいいました。すると彼はそれが私にとってベストであったと言ってくれたのです。」

「1959年のそれはスウェーデンの選手との準々決勝でした。私は、苦戦を強いられました。その時、その5年間で初めて長谷川コーチが私にサインを出しているのに気が付きました。そのサインにしたがって、私は、ボールを左右に振っていたのを止め、相手がブロックして来たところをうまく相手の腹の真ん中目がけて打ちました。相手はミスリ、私はようやく勝つことができました。それが、5回の世界選手権で長谷川コーチが私にくれたたった一つのアドバイスだったのです。長谷川コーチの作戦は100パーセント成功でした。」

「日本選手団の練習キャンプでは長谷川コーチはいつも私達のことをじっと見ていたので、私達選手はいつも彼の視線を背中に感じているようでした。練習にはいつも来ていましたが、タイム・キーパーをする傍ら、私達がどのように練習し、何故そうするのかということを実際に良く見ていました。そういった意味でも彼は非常に優れたコーチであり、協会役員であって、私は本当に彼のことを尊敬していました。」

荻村伊智朗はコーチをするにあたって創造的な挑戦をあえて行う創造的な人物であった国際的に活躍していた彼にはコーチをする時間はあまりなかったが、忙しいスケジュールを縫って暇を見つけては東京に帰って来てコーチをした。

「ベテランの選手達は勿論、ITSクラブの若い選手達には個人的に興味を持ってい

まず、時間があるときには東京のコミュニティ・カレッジでコーチもしています。ここでは、学生から大人までが学んでいます。適当な人格と意欲があれば誰でもコーチになれるのです。」

荻村は、1992年2月に南アフリカを訪れ、コーチのためのワークショップを行っている。

I T S クラブ

世界各地から日本を訪れる卓球人の多くは国際卓球会館にある I T S クラブを訪問し、そこで練習する機会を与えられる。東京都下の三鷹市にあるこのユニークなクラブは、荻村クラブの名で親しまれている。

「I T S クラブは日本の中でもユニークな会員制のクラブです。上の階は卓球を娯楽として楽しむ人のためのフロアで、下の階はその人たちのアドバイザーのためのフロアです。荻村さんはいつでもクラブをより良いものにし、選手の方が練習しやすくなるようにとアイデアを出していました。」（I T S クラブ・織部氏）



新時代の幕開け

「卓球はすべてやめました。」

1967年の世界選手権は日本選手団のコーチとしての荻村個人にとっては比類のない成功であった。が、日本卓球界の運営機構に対しては感心しなかった。試合進行をよりスムー



スなものにしようとするのに革新的なアイデアを出しても、彼個人の力では変化をもたらすことができないことを身につまされたのだ。失望し、疲れ果てた荻村は、卓球界を去ることを決意した。卓球界を変えることができる力を役員たちは持っているのにその力が必ずしも選手の利益の為に使われていないことが分かったのだ。

「日本選手団のコーチとして6つのタイトルを勝ち取った後、私は1967年に日本卓球協会を脱会しました。それから後、1972年までの5年間、卓球協会には一切近づきませんでした。卓球界のやりかたに失望したのです。私は疲れきっていました。まだ若かったので、気に入らないことには我慢ができませんでした、役員に私のアイデアを伝えるのが大変すぎたのです。私は、選手と一緒に過ごす方が好きでした。この5年間、私は一クラブ員として籍をおき、自分で始めた輸出入の商売のほうに集中しました。」

「この間、インテリア・デコレーション用の輸入家具を売るためにデパートで一日8時間立ちっぱなしで働いたこともあります。そんなことが2年間も続きましたが、その間、私のことに気が付いたのはたった一人だけでした。それは年配の女性で、私のそばを通りかかると、立ち止まって、『荻村さんでしょう。知ってるわよ。卓球の世界チャンピオンでしょ。』といてくれました。」

「その当時、私は非常に頑固な決意をしていました。有能な選手やコーチを育てることはできるけれども、役員や運営委員が選手の気持ちになって良い結果を得ようと努力するのでなければ、結局卓球はスポーツとして発展しないということが分かったのです。こうして私は1967年に卓球からすべてを引くことにしたのです。」

外国との交流

荻村は1970年、スポーツ界の役員としてではなく、一個人として中国を訪問し、故周恩来首相と会談し、国際的なスポーツ交流の重要性について話し合った。彼はこの年に3回中国を訪問し、そのことがきっかけで卓球界に復帰することになる。

当事の中国は文化大革命の真っ只中だった。荻村は、中国に対して、スポーツの価値を国際的交流と友好の為に利用するよう薦めた。荻村の訪問は中国関係者にその後長い間強力な印象を植え付けた。

「1972年は私にとって非常に大切な年でした。その2年前、私はもう卓球協会員ではありませんでしたが、自分の費用で中国を訪問し、首相とお会いして国際卓球界への復帰について話し合いました。それは復帰に際しての状況を彼に説明してもらう良い機会にもなりました。私は、首相に、こんな機会はもうそうそうないかもしれないと言いました。こうして、ピンポン外交は1971年にスタートしたのです。」

「それから後、アジア卓球協会の改革のために大変忙しくなりました。そんな中の1972年に、日本卓球協会会長であり、周恩来首相とのピンポン外交の日本側の担い手であられた後藤氏が亡くなられました。アジア卓球連盟は再構築を余儀なくされ、私にもアジア卓球界の運営に関わらないかという声がかかりました。」

「そうですね。私もそろそろ卓球界に復帰する潮時だと思っていました。今度は役員としてです。私は1972年に日本卓球協会の理事として復帰しました。」

「復帰した理由の一つは、良い役員がいればコーチや選手が優れたアイデアを実行に移す手助けになると信じていたからです。私が復帰したのは選手やコーチのことが忘れられ



CLUB
NAIROBI



これは、荻村伊智朗にとって全く新たな時代の幕開けであった。国際的卓球選手、世界チャンピオン、そしてナショナルコーチとしての栄光に満ちた過去を背負って、荻村は一体どんな役員になるのだろうか。

荻村の中には、選手とコーチの利益を最大限優先することがその国の卓球協会が成功するための絶対条件であることを信じる確固たる基盤ができていた。この信念を胸に、荻村は日本卓球協会に新風を引き起こすべく第二の人生に出発する。

役員としての荻村は着実にその足場を固めていった。1973年には国際卓球連盟の理事会のメンバーになった。このことをきっかけに荻村は国際卓球連盟の機能に親しんでいくようになり、その後日本卓球協会の推薦を得て国際卓球連盟の会長代理に選出され、朝鮮民主主義人民共和国の平壤で開催された連盟総会で正式に就任した。国際卓球連盟の全てを理解するためには、これ程理想的な地位はなかった。この時期、荻村が考えていたのは、機構的にも運営的にも国際卓球連盟には改善の余地がたくさんあるということだった。例えば、1985年から87年までの3年間に役員会が開かれたのはたったの2回だけであった。このことが意味するのは、国際卓球連盟が、卓球界の発展に十分なスピードで機能していないということだった。その当時の国際卓球連盟は、アジアからの役員の貢献が不足した状態のままヨーロッパの役員によって統率されていたのである。

1985年頃には世界各地で卓球のイメージの低下現象が見られた。世代間のギャップが国際卓球連盟内でも対立する意見や指導者層の分裂となって現れていた。このような状況の中でリーダーの交代が求められた。この時既に荻村はアジア卓球連盟から1987年の国際卓球連盟会長選挙に立候補するよう要請を受けていたのだった。

国際卓球連盟会長

1987年、インド・デリー市。国際卓球連盟の上層部に変化の風が吹き始めた。二年に一度の連盟総会がちょうど世界選手権と同じ時期に開催されていた。総会に参加した各国代表達は、二人の立候補者の中から次期連盟会長を選ばなければならなかった。一人は、現職候補のロイ・エヴァンス、そして、もう一人は、他でもなく荻村伊智朗その人であった。

「前々からアジア卓球連盟の役員の方々に国際卓球連盟の会長になることを勧められていましたが、1985年の時点では辞退していました。しかし、1987年になると、私を会長にしようという動きは更に高まっていました。私は自分なりに考えて、その時の国際卓球連盟はしかるべく運営されていないのだという結論に達しました。ミーティングはほとんど無かったし、あっても、大急ぎの朝食会で間に合わせる程度でした。私は、世界の卓球界を司る機構がこのような状態にあってはいけなかったのです。」

荻村は、世界卓球界に最善を欲していた。自分のアイデアと動機をもってすれば卓球というスポーツに改革をもたらすことができると信じていた。彼に必要なだったのはそのアイデアを実行に移すことのできる権力だったのである。

素晴らしい実績を持つ荻村に改革への期待は高まった。こうして、1987年、荻村伊智朗は国際卓球連盟の新会長の座についたのである。

会長の役割について荻村は明確なアイデアを持っていた。まず第一に、連盟とその構成員の利益のために一生懸命尽くすこと。彼の個人的満足は二の次にした。

「ある地位をその地位だけが目当てで得るのはつまらないことです。でももし、地位を得たのが、自分が何かを達成し、そのために貢献することができるという理由であれば



大変有意義なことです。それはちょうどコーチをしているみたいなので、大変クリエイティブな仕事です。他の人と一緒に働き、他の人を助けることに喜びを見いだすことができるのです。」

卓球を世界へ

国際卓球連盟の会長に就任した荻村がまず最初に気が付いたのは、当時卓球が実際にはヨーロッパとアジアの二大陸でのみ広く行われているということだった。これは卓球の世界的普及にとって好ましくない事実だった。彼はもっと世界中の人達が卓球に親しめるようにならなければいけないと考えた。



荻村が会長選挙にあたって公約したことは、第三世界、発展途上国への公式訪問を優先することでそれらの国における卓球の現状と普及への努力の様子を直接確かめることだった。

彼はまた、会長就任後2年間の間に連盟加盟国80カ国を訪問するという約束をしていた。世界卓球界を総括する機関のトップとして、荻村は卓球を、世界中の全ての人々が楽しめるスポーツにしたいという夢を持っていたのである。

当時の世界卓球界はアジア、ヨーロッパ諸国によってリードされ、アフリカ、オセアニア、ラテンアメリカの諸国は非常に遅れをとっていた。ヨーロッパやアジアの先進国の努

力や強さは貴重なものとしてあることを認めつつも、荻村はこのような状況は卓球界の将来にとって好ましくないことを痛感した。世界中に卓球を広めるという理想につき動かされ、荻村は活発に国際的使命を先導し、全ての大陸の国々に赴いたのである。

「訪問スケジュールを調整する時、私はレセプションや、観光のための時間は全て削りました。だから、ケニアに行ってもサファリには行きませんでしたし、ラスベガスでもカジノでギャンブルなどということはありませんでした。一旦そういうことを始めてしまうと、限られた訪問の中で貴重な時間とエネルギーを無駄にしてしまいます。私にとってもっと大切だったのは、そんなことより、学校やクラブを視察することだったのですから。それは、とても感動的で、とても楽しい訪問でした。一つの訪問が終わると、私は必ず視察の結果や提案を含めた詳しいレポートを提出しました。卓球を広めるために現地の人がどのような苦勞をしているか、ガーナやアルゼンチンやネパールで人々がどのような生活をしているかということのを他の国の人に知らせることはとても大切なことですから。」

荻村のビジョンは、全ての卓球ファンが自分の才能を最大限に生かす機会を与えているという事実を前提としていた。この事は、同時に、卓球が、豊かな先進国だけでなく、世界中全ての国に広められるべきであるという彼の信念を示していた。

「卓球が世界中に普及するということは、私にとって、世界のすみずみで卓球が人々に親しまれるということの意味していました。そのためには、高い技術を持った選手を世界中に派遣して、全ての人が世界トップクラスの技術に触れることができるようにすることが大切です。若い選手には目標が必要なので、世界のトップ・プレイヤーの試合を見る機会を与えることが一番良い方法なのです。柔軟な若い世代に本物の技術を見せることが必要なのです。」

世界スポーツの複雑さを理解しながらも、荻村は彼の壮大な目標の実現に着手し、不可能に見えたことをも現実にしてしまう行動力を示した。会長に就任してから現在までに既にいくつもの国際的イベントをナイジェリア、ケニア、ベトナム、マレーシアなどの国々で開催し、国際卓球連盟会長として初めてラテン・アメリカの国々にも訪れたのである。

しかし、保守的で無難なやり方を好む役員の中には、荻村の革新的なアイデアを好まないものもいた。

「私は、現代社会の変化に対応して卓球界に変化が起こっているのを見るのが好きなのです。国際社会で卓球が肯定的なイメージを持ち続けるためには斬新でクリエイティブなアイデアを常に出し続けることが必要だからです。沢山の人が、私たちは先を急ぎ過ぎていると思っているようですが、私はむしろゆっくりし過ぎていると思うのです。」

「卓球の世界化というポリシーの元で国際卓球連盟にとっての一つの挑戦であったのは、どのようにして才能ある選手に最高の環境で練習できる本当の機会を与えるかということでした。その答えの一つとして、世界の全大陸に才能ある若手選手のための卓球学校を設立してはというアイデアがでたのです。」

荻村と平和的使命

選手、コーチ、あるいは役員として、荻村は、その卓球人生のほとんどの期間、スポーツ親善大使の役割を果たしてきた。彼は、スポーツによって国々にありがちな分裂や敵対関係の解決の糸口を見つけようとしてきた。このような外交的使命の裏には、日本人として国際社会で積極的、肯定的な役割を果たしたいという意欲があった。

「国際的な経験をすることが好きなのでですね。一日本人が国際的な舞台で貢献できるということは大変大切なことだと思います。もし、スポーツ人や、スポーツがもう少し頑張れたら、スポーツや、その副産物はとても大切なものになり得ると思います。スポーツを通して私達はお互いのことを知ることができ、スポーツ文化を通してお互いに影響を与え合うことができますのです。世界にはいまだにいろいろなギャップや、混乱や、憎しみや、誤解がありますが、言葉を必要としないスポーツはその解決に貢献できると思います。スポーツにはルールがあり、競技があって、誰がフェアで、誰が偉大かすぐ分かり、スポーツを通じてお互いを理解することができるのです。卓球が世界中どこでもでき、どこでも親しまれているスポーツだということはとても素晴らしいことです。だから、わたしの使命は私にとって大変興味のあるものですし、興味があるからこそ私は一生懸命努力し、一生懸命働いているのです。」

荻村は、中国の国際スポーツ界への登場に重要な役割を果たし、日本卓球協会がサウジアラビアの卓球関係者と交流するきっかけをつくった。しかし、彼の最大の外交的使命は1991年に東京で開かれた世界選手権であった。何ヵ月にも及ぶ難しい協議の末、その世界選手権では、南北朝鮮が統一チームとして登場したのである。続く1992年には、ワールドカップがベトナム戦争以来初めての国際スポーツイベントとしてベトナムで開催される。これらのイベントは荻村伊智朗の国際的リーダーシップが可能にしたものである。

「スポーツは人間文化の一部であり、同時に、人間の歴史と文化の創造物でもあります。どんな文化も、元は政治の為に利用される性質を持っていましたが、やがてそれぞれの文化が独自の発展を遂げるようになったのです。」

荻村は今まで訪れたすべての国に関して素晴らしい思い出を持っている。どの国にあっ

でも、彼は文化に敏感で、すべての国の文化に敬意を払った。荻村は訪れる国々で歓迎された。そして、彼の印象は長い間人々の間にあり続けたのである。

「多くの重要で、興味深い国々を訪れました。南アフリカのソウェトもその一つです。もし南アフリカで統一された協会ができれば、それは有色人種と白色人種の統一を示す重要なシンボルとなり、その影響はアフリカ全土に及ぶことになるでしょう。その意味で、南アフリカはアフリカ全体を代表する最も重要な国の一つとしてわたしの記憶にはっきりと刻み込まれています。」

大志と挑戦

荻村が野心的な人物だったことは疑いなき事実である。その野心とは世界の国々の間に平和、友好、交流を推進する手段としてのスポーツの利用を実現する事であった。

上原夫人は、この野心を若い頃の荻村に見ている。

「荻村が負けず嫌いであったことは確かですが、だからといって自分より程度の低い選手を馬鹿にするようなことは決してしませんでした。彼は現実の世界を信じていて、何に対してもベストを尽くしていました。万一試合に負け、次の試合では必ず勝ってや



るという信念を持っていました。彼はいつでも自信に満ちあふれていました。」



「ターニング・ポイント」

荻村は自分が野心的であり、失敗や敗北に打ちのめされることのない強さを持っていることを認める。しかし同時に、失敗によって得るものも多いと信じている。失敗することによって初めて人は物事に対するより良い見方をするようになれるものだと。

「大学2年生の時日本選手権の東京予選に参加した私は予選ラウンドで敗退するという失態を演じました。その時、私は切羽詰まって考えました。卓球をやめるべきか、それともこのまま続けるべきか。結局続けることに決めたのは、もしここで、失敗したからといってやめてしまったら、その事実は私が死ぬまでついてまわると思ったからです。」

「私は自分にこう言い聞かせました。卓球をやめるのは成功した思い出を持ってからでなければいけない。だから、成功するまでは卓球を続けなければいけないのだ、と。これは、私にとってある種のターニング・ポイントでした。この時、私は人生の一節を越え、失敗に打ちのめされるのを拒否したのでした。このことは又私がそれから先の長い卓球人生を送ることを意味していました。」

「自分の好きなことをする」

「私はいつも、自分が他の人とは少し違った人間だと思います。高校や大学時代、友人のほとんどは将来何をするか、どんな仕事を選んでどんなキャリアを積むかというようなことをもう決めていました。私は、そうやって決めてしまうことはしませんでした。ちょっとセンチメンタルだったのかも知れませんが、でも、私は私の好きなことをやって行きた

「私のこんな決意は若い日本人にとって論理的なものではありませんでした。私の通った中学校は日本でも一番よい学校の一つで、その生徒達は普通、自分のキャリアについて早いうちから決まった考えを持っていました。私は子供のころは外交官に憧れていて、それから、報道関係の仕事もしてみたいと思いました。大学では映画製作も学びました。」

「自分でも私には沢山の才能があると思います。でも、大切なのは余計なものを切り捨てて行くということです。あまり沢山のことに手を出してしまうと失敗したり、程度が落ちてしまったりします。今のところ、私にとって卓球や、それに関連することはいまだに魅力的な存在ですが、将来他のことをしてみたいとも思っています。」

野心を持つこと、成功することは勿論大きな価値のあることだ。しかし、いつでも自分の望むように物事が運ぶとは限らない。そして多くの場合、野心や成功を求めることによって傷つくのは自分が愛する人達である。荻村は、野心や挑戦というもののあまりの素晴らしさに、人間はしばしば達成することへの欲求の中で自分を見失ってしまうものだという。

「何かに挑戦していて、それを達成することだけに没頭してしまうと家庭にいない時間が多くなってしまいます。私が国際卓球連盟の会長選挙に立候補することを決めたとき、私の妻は、そんなことは忘れて、何か他のことにエネルギーを使ったらどうかと言いました。私は結局、立候補しましたが、これは、家庭にいる時間を犠牲にするということでした。今考えると、妻はなぜ私が会長にならなければならなかったのか、何を貢献しなければいけなかったのかということをいくらか理解してくれていたとは思いますが、初めのうちは大変でした。私が会長を続けられるように会社の人々、日本協会の人達、クラブの人達など不在中に仕事を助けてくれる大勢の人達も大変な思いをしています。彼らに感謝しています。」

荻村は自分の野心に溺れることはしなかった。野心というものは目標、成功、忍耐、そして適当な評価があってこそ生きてくるのだということが彼にははっきりと分かっていたからだ。

「私たちは、忍耐強くならなければならない。目標に向かって急ぐときでも我慢強くなければいけません。そして、理想を高く持って、困難を一つ一つ克服して行くのです。目標を定めるときには、大きな目標と小さな目標を同時に定め、小さな目標を一つずつ達成して行くことでその日の成功を感じ、その上でより大きな目標に向かって努力して行くことが大切なのです。ポジティブで、楽観的な考え方を身につけることも大事ですね。さもないと、胃の病人が沢山でてしまいますよ。」

荻村第二の人生？

荻村の人望は国内、世界でも非常に高く、彼が外交官、或いは政治家として活躍することは容易であらうと思われていた。

しかし、荻村は政治に魅力を見いだせなかった。彼は、スポーツのほうが政治そのものよりもっと沢山の成果をもたらすことができると思っていたのである。

もし荻村があと2年早く生まれていたら、彼の人生は全く違ったものになっていたかもしれない。彼はきっと日本のために戦争に参加しただろう。生まれるのが少し遅かったために荻村が戦争に参加する機会はなかったのである。

「私の生き方は、何か見つけたらそれに熱中してその分野で重要な人物になることでした。もし5、6年遅く生まれていたら違う事をしていたかも知れません。」



「今の人生のようではなく、単に卓球をやっていただけかも知れません。子供の頃、私の家にはある年配の女性がいて、私の面倒をみてくれていました。いってみれば、家の乳母のような人で、今でも一年に一度は会っています。その女性は私が読書が好きだったので大人になったら学者か教授になると思ってはいたようですが、スポーツ人になるとは夢にも思っていなかったといっています。」

「外交官とか政治家としてのキャリアにはあまり興味がありません。どちらかといえば、外交の分野のほうが政治の分野よりおもしろいかも知れませんが。」

荻村の日本人としての誇りは、第二次大戦中、日本人であることが何を意味するかということを知った時に端を発していた。日本が犯した数々の罪を見て、荻村は、日本にも良いことができるのだということを世界に示したかったのである。

「第二次大戦中、私は本気で空軍のパイロットになって敵機に体当たりし、私の国の人々を守るつもりでいました。なぜなら、その時まで既に日本の敗北は目に見えていたからです。爆撃機編隊の低空飛行で空も見えなくてね、真っ暗だったし、大きな爆撃機がきて、大変だった。私が14才のとき戦争は終わりましたが、もし、2年早く生まれていて15才か16才になっていたら多分戦争に行っていたでしょうね。でも、この戦争で沢山のことを学びました。日本が近隣諸国に多大な被害を与えたことも知って、今、アジアのスポーツ人たちが日本人の国際卓球連盟会長を受け入れ、支援してくれることに非常に感謝しています。」

それでは、荻村は、卓球の後どんな人生を送るのだろうか。彼はこの後の人生で一体何がしたいのだろうか。

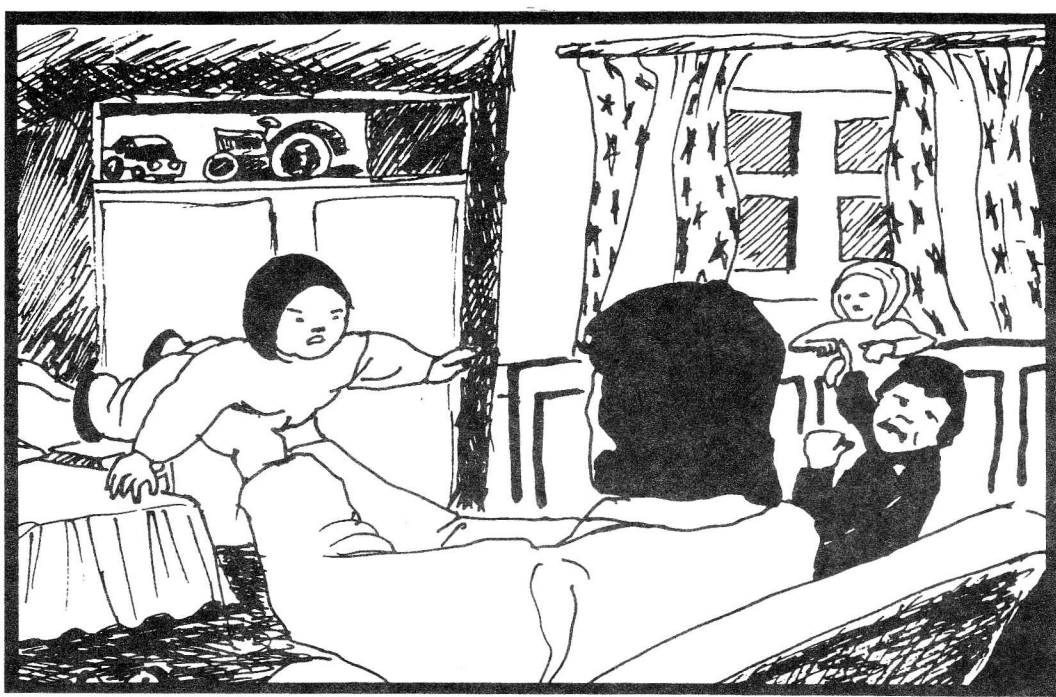
「卓球以外にもしたいことはまだまだ沢山あります。アンビションもあります。小説も書いてみたいし、コーチもしてみたい。日本代表のコーチも。これまでのキャリアの中で、私はとても沢山のの人に会いましたが、皆それぞれ違って、興味深くて、複雑な人々でした。文化についても沢山学びました。人々がどのように生活しているか、どのように人生をエンジョイしているか。本当に沢山の思い出がありますから、小説を書いてそれを他の人々と共有できたらもっとおもしろいと思います。」

しかし、荻村が自分のことを描写するのはそう容易なことではないだろう。彼は他の人が自分のことを普通ではないと思っていることにも気づいている。

「そう、とても難しいですね。時々、私も自分があまり普通ではないと思いますもの。でも、異常とか、クレージーとか思ったことはありません。自分では普通だと思っているんですが、他の人から見ると普通じゃないんですね。ええ、私は静かな時が好きです。一人で考え事をしたり、書き物をして一カ月ぐらい過ごすこともできますし、一方で一週間続けて毎日ミーティングにでることもできます。」

日本の社会の特徴の一つはその厳しい勤務形態だろう。荻村の、無償の国際的会長としての仕事量は巨大なものであり、従って、彼がレジャーや娯楽に過せる時間はほとんど皆無に等しい。

「私は、毎年500時間以上過ごす飛行機の中での時間を楽しみにしています。その時だけは一人になれるから。この時間を使って、仕事をしたり、何かをまとめたり、休憩したりするのは。飛行機の中で眠って、起きると、頭がすっきりして、よりクリエイティブで革新的なアイデアが浮かんでくるようになるのです。」



このことは、つまり、相当な時間を家庭の外で過ごすことを意味する。

「そうですね。家族、特に私の妻にはつらい思いをさせてきました。もし私が、自分の才能を違う方向に使っていたら妻はもっと喜んでいたかも知れません。」

荻村は芯の強い、独立心に富んだ人物である。

彼は、日本人は思いやりが無く、冷たい民族であるという通説を覆した。世界中の人々

が彼の暖かさと親しみに満ちた態度に触れているのである。

非常にタフな荻村にも弱点があった。それは、4人の孫たちである。

「4人の孫がいますね、彼らは、最高ですね。彼らが大きくなったらより良い経験ができるように協力しようと思っています。でも、その子の親たちの邪魔はしません。」

「一番最初の孫が生まれたときは本当に感激しました。それから後の孫たちの時も。」

上原夫人も彼の子供好きを認めている。

「荻村は孫たちに対しては見境いがないですね。本当に目に入れても痛くないほどかわいがっています。」

荻村伊智朗の人格は戦後の日本と複雑な国際社会のなかで育まれてきた。その中でも特に彼の人生や考え方にいろいろな意味で影響を及ぼした人物を次に紹介しよう。

禅の影響

「宗教や哲学の学校には色々な種類があります。日本では仏教に端を発する禅という哲学が発達しました。大変多くの人が禅の影響を受けています。禅は、多くの人が勘違いしているような座禅という瞑想法だけを教えるものではありません。禅は、人生の哲学なのです。禅の論理では、人は一生に一度しか他のある人に会う機会を持っていないかも知れないのです。」

「だから、もしある人に会って、その人とはもう会わないかもしれないと思ったらいくら眠けても疲れていても他のことをしていてもその時にその人に会う努力をしなければならぬのです。なぜなら、次の機会はもうないかもしれないのですから。10分でも一時間でも、もしその人に会う機会はもうないかも知れないと感じたら、その機に自分の全能力を持って当たるべきなのです。」

他のスポーツ協会の会長たちも荻村伊智朗の考え方や視点に大きな影響を与えた。荻村が日本代表選手だった時のコーチであった長谷川氏、卓球を始めるきっかけとなった2人の生徒達、そして、矢尾板氏も荻村に多大な影響を与えた人物だった。

荻村は他にも次のような人物に影響を受けている。

「国際卓球連盟前会長のアイボア・モンターギュ氏。彼は、クリエイティブで、革新的で、思考者であり、かつ実行者でした。彼がいかにか偉大で、いかにいつも未来を見ていたかということをいつも思い出します。彼は26歳の若さで連盟の会長になり、国単位ではなく、協会単位を連盟の成員にし、国旗や国家を使わないことにしました。南アフリカの非人種主義卓球協会を1957年に加盟させました。政治、人種や宗教による差別を否定し、実行しました。」

「中国の周恩来首相は、政治家が、スポーツ人によって用意された機会を国民や国家のために使うことができるのだということを示してくれました。彼はスポーツを通して人々を分離させるのではなく一緒にすることで政治にもスポーツにも価値を与えようとしていました。」

「反対に、アメリカのカーター元大統領やソビエトのアンドロポフ氏などは、モスクワやロサンジェルスでのオリンピックのボイコットをそれぞれの陣営に働きかけ、人々を分離させるためにスポーツを利用していました。勿論、これには沢山のそれ相当の理由があっ

たのでしょうが、私とすれば、人々が互いに出会うためにスポーツを利用する政治家の方が好きです。なぜなら、スポーツの場で人々が会えなければそこから何も始まらないのですから。互いに敵同士だと思っている人々であってもスポーツの場で一緒に競技することはとても大切なことなのです。実際、アメリカと中国はピンポン外交によって国交を回復したのです。だから、スポーツをボイコットの手段に使った国々は私にとって反面教師と言えるでしょう。どちらにしても彼らに影響を受けていたのは事実ですから。」

しかし、最近数年間荻村に多大な影響を与え、同時に憧憬の念を抱かせたのは国際オリンピック委員会会長フアン・アントニオ・サマランチをおいて他にいなかったであろう。荻村はサマランチに関して好ましくない評判があることも知っていた。しかし、今日のスポーツにおける彼の地位と貢献は他に比するものがないと荻村は信じていた。荻村にとってサマランチは歴史上で最も偉大なスポーツ運営者の一人であったのだ。

「サマランチの指導力によって、アイデアをどのように実行に移すかということが示されました。もしあるアイデアがあって、それが素晴らしいアイデアであるとする、それは、普通のアイデアとは違うことになります。普通のアイデアからは遠くかけ離れたものです。ここでもし人々がまだ普通のアイデアのレベルにいれば、彼らが通常見慣れているものとその素晴らしいアイデアとのギャップは非常に大きなものになります。そのギャップを埋めるためにはどのような人とどのようにして会ってどのように人々にそのアイデアを伝えて行くかということが大切になってきます。それをしなければ、人々はそのアイデアに賛成しないばかりか、無視したり、拒否したりしようとするのでしょうからね。」

「このようなビジネス的な方法を紹介したのがサマランチです。彼は、国際機関の会長に対して人々が持っていたアイデアとイメージを変えてしまいました。サマランチが会長になる前には、I O C 会長が I O C 本部を訪れるのは年に 2、3 回でした。サマランチは

会長になるとローザンヌに移り住み、陣頭指揮を始めました。スポーツの為にという意味では私よりも働いています。サマランチから学ぶことは沢山あります。彼に嫉妬する人は沢山いますが、私にとって彼は非常に良い手本なのです。」

「彼は、調和のアイデアを世界に紹介しました。それは、アイデアを力で押し通すのではなく、理解によって実現させるというやりかたです。又、彼は、変化しやすい問題には待つことも知っていました。来るべき時が来ればなるようになる、というわけです。この良い例が南アフリカのスポーツです。」

「サマランチは歴代IOC会長達とは大変異なっていました。私が選手だったころのブランデー会長はとても古典的なIOC会長で、多くの意味で伝統を重んじる人でした。理想が高く、アマチュア精神を信奉していました。」

「卓球がオリンピック・ムーブメントの認定種目として認められましたが、1970年代にはまだ条件付でした。その条件というのが、プロフェッショナル・アマチュアの定義はないという態度を放棄してアマチュアとプロフェッショナルの定義を入れるということと、もう一つは国家と国旗を導入することでした。サマランチの時代になってIOCはアマチュア定義のアイデアを放棄しました。こうして、IOCのコンセプトはモンダーギュ時代から私たちがもともと持っていた定義に非常に近いものとなったのです。」

このような人々と出会った経験から荻村は沢山のこと、特に国際社会との関わり合いについて学ぶことができた。

「人は、自分のキャリアや人生を通じてできるだけ沢山のの人に会いたいと思います。同時に色々な国に行って様々な文化に触れ、その上で成功者になることを願っています。選手やコーチとしても同じです。選手として、コーチとして、又同時に運営者として成功したいと願っているのです。」

「沢山の人に会える機会が沢山あって、沢山の人々が私に影響を与え、私の感受性に訴えかけてきました。彼らの発するメッセージやシグナルに私は敏感で、即それらに対応していました。これによって大変助けられました。」

並外れた才能や能力をもつ人間は少ない。しかし、そのような人が近くにいる場合は、その人は何をするのに挑戦的なやり方で行い、必ず有益な結果を得ているのを観察することができるだろう。しかし、そのような才能を外界に発揮する前には彼らの人間的基礎は必然的に彼らの両親によって形成されるものである。荻村伊智朗の人生の初期に影響を与えたのは彼の母親だった。荻村の精神面の発達を促したのは彼の母の熱心さで、そのお陰で、彼は5歳のときにはそれよりずっと年上の子供用の文学を難無く読みこなせるようになっていた。

「母は私の教育に非常に熱心でした。そのお陰で、5歳の時には少年用の本はほとんど読めるようになり、11歳では大人向けの小説も読んでいました。」

卓球台に向かって過ごした長い時間も彼の読書熱を冷ますことはなかった。

「世界チャンピオンになるまでに1,000冊以上の本を読みました。その分野は広範囲で、哲学、小説、詩や様々な国についての本などいろいろでした。私の感受性は、読書によっても磨かれていました。」

「私の読書好きは、母によって培われたものでした。彼女は出掛けるときには必ず私が読む本があることを確かめていました。私は一人っ子でしたので、私が寂しがらないようにと思ったのです。」

荻村の読書量は彼の知識豊かでクリエイティブな頭脳に顕著に現れていた。彼は世界中のほとんどの国の文化は勿論、偉大な思想家、音楽家などの芸術家の哲学についての見識も持っている。先見の明があり、奥が深く、油断がないという言葉が彼の知力を形容するのに最もふさわしい語の一部であろう。

荻村伊智朗は、今の時点では、後どのくらいの間国際卓球連盟の会長であり続けるかはまだ決めていない。連盟指導層に彼が課した数々の変化はまだ進行中である。彼は卓球が世界中のすみずみで人々に親しまれるのを自分の目で確かめたいと願っている。これは、「卓球の世界化」というスローガンの元に進行中の彼のキャンペーンの一部である。

「結果はそうすぐに現れるものではありません。結果を得るためには長期間にわたって努力し続けなければならない。私の訪問がその国の卓球連盟の勤勉な役員達の刺激や動機になってくれればベストです。そこからどのように卓球が発展して行くかはその国全体の富と発展状況にかかっているのですから。」

荻村の意見は正しい。どこに行っても彼の存在はその国に刺激的な影響を与えた。彼の訪問は、彼が次の訪問国に向けて去ってからも長い間人々の間で語られているのである。

荻村伊智朗は日本人であり、アジア人であったけれども、世界中の人々に関して著しい敏感さを持っていた。スポーツ人としての何十年にもわたる努力の結果、彼は戦後日本の善意を示し、世界中の人々に助けの手を伸ばしたのである。

しかし、荻村にとって最高の時はまだこれから訪れるようだ。その時とは、発展途上国の卓球界が世界卓球界とのギャップを大きく縮めて地球上のあらゆる地域からチャンピオンが生まれ出るときだ。世界中にトップレベルの卓球を広める今までの彼の努力に失望しているわけではない。彼の忍耐強さがもう少し辛抱強く待てと言っている。しかし、荻村

は世界の全大陸で彼の仕掛けた事が始まるのを見たいという願望をそっと胸に抱いている。

「今のところ結果はそんなに現れてきていません。もう少し時間がかかるでしょう。それは大変ゆっくりとしたプロセスです。皆がもっと自信を持ち、世界的意識を持って世界的支援と援助を続けて行くことが大切なのです。」

荻村をここまでつき動かしてきたものは政治や文化的相違に関係なく卓球を世界化しようという彼の目標だった。しかし彼の類い希な能力や創造力にもかかわらず荻村も一個の人間で、彼にできることには限りがある。彼の夢が実現されるかどうかは、国々を説得しその国の政権からどの程度の支援を受けられるかということに大きく依存している。

荻村の夢が実現されるのはずっと先の世代になってからかもしれないし、近い将来の事かもしれない。時のみはその答えを知っている。

それまで荻村は全力を尽くし続ける。

選手、コーチ、運営者兼親善大使としての彼の素晴らしさ、そして彼の誰にでも好かれる人柄は、荻村をしてスポーツ史上有数の伝説的存在にならしめる価値がある。そして考えてみたいのは彼が戦後の非常に貧しい状況からスタートしたということである。彼が示した一番の教訓はどんなにつらい状況であっても質実成功への自信を持つことが必要だということである。戦後日本は荻村のスポーツ界での偉業によって誇りを取り戻した。そしてその誇りは今日の日本にも受け継がれているのである。

Ichiro Ogimura

Ichiro Ogimura's brilliance as a player, coach, administrator-cum-ambassador coupled with his likeable nature must rate him as one of the sporting legends of all time. And to think that he started off in the most humblest of beginnings. One thing he did show was that humility and confidence to succeed were all embracing criteria even in the wake of the most adverse opposition. Post-war Japan was done proud by the sporting exploits of one Ichiro Ogimura. Today, he continues in that same tradition: bringing untold pride and honour to modern Japan.

